第五章　薫の物語　明石中宮の女宮たち

［第一段　薫と小宰相の君の関係］

　后の宮の（皇后の明石中宮は）、*御軽服のほどは（御叔父の故式部卿宮の御軽服の間は）、なほかくておはしますに（そのまま六条院で謹慎していらっしゃいましたが）、二の宮なむ式部卿になりたまひにける（二の宮は式部卿にお成りなさいましたので）、重々しうて（以前のように少人数で気軽に出歩く事がお出来になれず）、常にしも参りたまはず（あまり日常的には母宮の御見舞に参上なさいません）。*この宮は（が、この兵部卿宮は、同じ六条院の夏の町から春の町へ渡るだけのことなので、よく母宮を御見舞申しなさり）、さうざうしくものあはれなるままに（その序でに、姫を失った空虚さから人恋しくて）、一品の宮の御方を慰め所にしたまふ（堅苦しい源氏姫の所よりは、姉君の女一の宮の御部屋を寛ぎ場所にしていらっしゃいます）。よき人の容貌をも（女一の宮社中の女房どもには、顔立ちの良い）、えまほに見たまはぬ（匂宮がまだよく御存じない者も）、残り多かり（多く残っていたのです）。　*「軽服（きゃうぶく）」は＜遠縁の者の死去による、軽い服喪。また、そのとき着用する喪服。＞と大辞泉にある。注に＜明石中宮の叔父の故蜻蛉式部卿宮の軽服、三か月間。＞とある。二章四段で、兵部卿宮が姫の訃報を聞いて寝込んでいた三月末だろうか、薫殿が宮を見舞った際に、「そのころ、式部卿宮と聞こゆるも亡せたまひにければ、御叔父の服にて薄鈍なるも、心のうちにあはれに思ひよそへられて、つきづきしく見ゆ」とあった。光君の弟宮、恐らくは末弟の九の宮、であったらしい故式部卿宮は明石中宮にとっても、源氏大臣にとっても、薫殿にとっても叔父である。　*「この宮」は注に＜匂宮＞とある。匂宮を「この宮」というには、その指示代名詞が指し示すべき前振りがあるのが、普通のものの言い方だ。だから、こういう唐突な言い方自体も分かり難いが、全体の文意も実に分かり難い。が、それでも手掛かりはある。即ち、上文で明石中宮が六条院に里下がりしていて、ということは、春の町の寝殿に居て、今までなら、其処へ気軽に顔を出していた二の宮が式部卿を襲ったので、そうは簡単に出歩けなくなった、と語られているのだから、此処で「この宮は」と切り出すのは、同じ中央官庁の長である兵部卿三の宮は二の宮とは違って、二条院に出向くこともあるが、主たる自邸は六条院夏の町というのが建前なので、当然に六条院に居る事が多く、であれば、母宮の見舞を口実に夏の町から春の町へ渡るのは、同じ邸内のことなので行列を仕立てる必要は無く、わずかな従者を従えれば容易く移動でき、その実、母宮の見舞は本人同士は特に代わり映えもない限りは互いに面倒でもあり、匂宮は窮屈な夏の町に居るよりも、春の町の東の対へ出向いて女一の宮の部屋で寛いでいた、という事情を、女房内の世話話なら言わずもがなの分かり切った事として省いて、話を急いでいるものと、他に良い解釈も浮かばないので、取って置くことにする。また、左様に明示補語して置く。

　大将殿の、*からうして（大将殿が、この女一の宮社中の中で唯一）、いと忍びて語らはせたまふ（ごく内密に情を通わせなさる）*小宰相の君といふ人の（小宰相の君という人は）、容貌などもきよげなり（顔立ちも美人で）、心ばせある方の人と思されたり（よく気が付く心配りの出来る人と大将もお思いでいらっしゃり）、同じ*琴を掻きならす、爪音、撥音も（同じ箏の琴を掻き鳴らす爪音や撥の音も）、人にはまさり（他人より優れ）、文を書き、ものうち言ひたるも（手紙を書いても、何か言うにも）、よしあるふしをなむ添へたりける（教養のあるところを見せていました）。　*「からうして」は＜やっとのことで＞と訳文にある。「やっと」とは、

この常陸女を失った無常観の中で＜そうは言ってもやはり＞という意味だろうか。それとも、今の薫大将の状態に関わらず、定常的に女関係に淡白な薫殿の＜数少ない手づるながら＝ほぼ唯一の＞という注釈みたいなことだろうか。まぁ此処で語り手が殿の心中を忖度して差し出口を挟むのは馴染まない気がするから、やはり後者の事情説明なのだろう。だとすれば、「やっと」という表現は不適切で＜唯一＞と言うべきだ。また、「手づる」であるということは主に女一の宮に私用を取り次ぐ連絡係で、必ずしも情人とは限らないだろうが、「いと忍びて語らはせたまふ」の「いと忍びて」は、「語らふ」を＜相談する＞ではなく＜情交する＞と読めと言っているに違いない。だとすれば、悲嘆に暮れる薫殿が＜今「からうして」情を通じる＞とは読み難く、むしろ＜以前から「からうして」情を通じていた＞という方が読み易い。などと口説口説しいが、それくらい此処の文意は取り難い。にも関わらず、相当に重要な事情を語っているらしい匂いがして、非常に厄介だ。　*「小宰相の君（こさいしゃうのきみ）」は注に＜女一宮のもとに伺候している女房、小宰相君。『完訳』は「「--の」は、「同じ琴を--」に続く。その間は挿入句」と注す。＞とある。参議の家柄の女で、他にも女一宮社中には宰相君がいて、若手だから「小」が付いた、みたいなところだろうか。ともあれ、構文把握は『完訳』に従う。でないと、私には文意が取れない。　*「琴」は「こと」と読みがある。十三弦の箏の琴なのだろう。

この宮も（この六条院住まいの兵部卿宮も）、年ごろ、いといたきものにしたまひて（年来、この女房をとても気に入っていらっしゃって）、例の（このところの憂さ晴らしで）、*言ひ破りたまへど（今まで以上に切に寂しいと強く口説いて迫りなさったが）、「などか（何故か宮さまご自身はずいぶん思い詰めて仰っているお心算らしいが）、さしもめづらしげなくはあらむ（こんな風に迫り為さるのは、然して珍しくもないことじゃないですか）」と（と小宰相君は）、心強くねたきさまなるを（強情に靡かず相変わらず澄まし顔なのを）、まめ人は（まめびとは、実直な薫殿は）、「すこし人よりことなり（少し変わり者だな）」と思すになむありける（と面白がっていたようなのです）。　*「言ひ破る」は注に＜匂宮が薫と小宰相君の仲に水をさすような悪口を言う。＞とある。が、そう読むには、上の「いといたきものにしたまひて」を＜匂宮が薫殿と小宰相君との仲をひどく妬んでいらっしゃって＞と読んで置く必要がある。が、前の文は薫殿と小宰相君の仲睦まじさを語ったものではなく、小宰相君の秀でた人柄を語っていたので、「この宮も」の「も」は＜薫殿と同じように＞という同類者としての共通項である＜男心＞を話題にしている、と読むべき文脈かと思う。であれば、この「言ひ破る」は＜悪口＞という特定の具体意ではなく一般語用と解すべきだ。となると、「言ひ破る」は＜言い負かす＞や＜前言を翻す、約束を破る＞という言い方に成りそうだが、それでは文意が成立しない。そこで思い付いたのだが、此処にある「例の」は＜いつものように＞ではなく、前に語られた「あだなる御心は慰むやなどこころみたまふこともやうやうありけり」（四章八段）が此処最近の匂宮の生活態度で、そういう＜「あだなる御心」のままに＞という意味なのではないか、ということだ。であるなら、この「言ひ破る」の「言ふ」は＜言い寄る、口説く＞だが、「破る」は＜今までの殻を破る＞または＜悲しみを紛らす＞ような意味で、つまりは＜非常に強く迫る＞という言い方に見做せるかもしれない。と、ちょっと大振りの気もするが、一先ず思い付きに懸けてみる。と、私には全体の文意が分かり易くなったが、どうなんだろう。

かくもの思したるも見知りければ（そんな小宰相君は、大将殿が姫の死で思い沈んでいらっしゃるのを見知っていたので）、忍びあまりて聞こえたり（同情されて黙っていられずに、このように手紙で申し上げました）。

「あはれ知る心は人におくれねど、数ならぬ身に消えつつぞ経る　(和歌 52-04)

「もの言へば と言うのですらも をこがまし　(意訳 52-04)

*注に＜小宰相君から薫への贈歌。『完訳』は「暗に、浮舟にも劣らぬ己が恋情であるとほのめかす」と注す。＞とある。「人におくれねど」の「人」を＜常陸姫＞と読んでみれば、「暗に」どころか、猛烈な売込みだ。

*代へたらば(私が代わりに死んでいたら、良かったでしょうに)」　*注に＜歌に添えた詞。『弄花抄』は「草枕紅葉むしろにかへたらば心をくだくものならましや」(後撰集羇旅、一三六四、亭子院御製)を指摘。＞とある。羇旅(きりょ)は旅情の歌ということで、旅寝の侘しい草枕も美しい紅葉を布団にしていたら左遷に腐ることもない、という負け惜しみかと思ったら、亭子院(ていじのゐん、宇多上皇)の御歌なので、優雅な旅情なのかもしれない。でも、「心をくだく」とあるので、寂しげな風景を白居易の詩文にでも洒落て遊び詠んだか、実際には荒涼とした景色を反実仮想で言い表したか、風光自体は絶景ではなかったようでもある。で、この歌を丸々踏んだものなら、この「代へたらば」は、「草枕」となった故人の代わりに「紅葉蓆」の私があなたを慰めます、と言っているように見える。が、それでは押しが強すぎる。だから、「紅葉蓆」の故人に代わって、私が「草枕」になっていたら、こんなに殿を悲しませずに済んだことでしょう、と言っている、と見なければ美談にならない。ただ、どういう言い方をしたにしても、私が故人の代わりになるなら、と誘っていることに変わりはない。

と、ゆゑある紙に書きたり(と風情ある紙に書いてありました)。*ものあはれなる夕暮(梅雨空の物憂げな夕暮れの)、しめやかなるほどを(しみじみした気分を)、いとよく推し量りて言ひたるも、憎からず(よく察して言って来たのも気が利いています)。　*「ものあはれなる夕暮」は、姫の四十九日も過ぎた五月半ばのことだろうから、梅雨・五月雨の頃なのだろう。

「常なしとここら世を見る憂き身だに、人の知るまで嘆きやはする　(和歌 52-05)

「人知れず 嘆いてこその 無常かな　(意訳 52-05)

*注に＜薫の返歌。『集成』は「よくぞ察してお尋ね下さった」。『完訳』は「浮舟だけを深く思っているように思われるのは心外だと反発」と注す。＞とある。「嘆きやはする」は「反発」だろうか。むしろ、「人の知るまで」女々しく嘆いては＜お恥ずかしい＞と言っているように見えるが。

*このよろこび(この御見舞のお礼は)、あはれなりし折からも(悲しみ深い時でしたので)、いとどなむ(ぜひ直接に、申し上げたく)」　*「このよろこび」は注に＜以下「いとどなむ」まで、歌に続けた詞。「このよろこび」とは小宰相君の弔問に対するお礼、の意。＞とある。

など言ひに立ち寄りたまへり(と、薫殿は姉君の明石中宮を御見舞申しなさった折に、小宰相君の所に立ち寄りなさいました)。いと恥づかしげにものものしげにて(薫大将は相手がとても緊張させられるほど威儀を正して)、なべてかやうになどもならしたまはぬ(普段はこのように女房の部屋に立ち寄りなさるような振舞いをなさらぬ)、人柄もやむごとなきに(人

柄も尊いので)、いとものはかなき住まひなりかし(小宰相君はごく簡素な住まいの)、*局などいひて(局という廊下部屋で)、狭くほどなき遣戸口に寄りゐたまへる(狭く簡素な出入りの引戸口に大将殿が寄り掛かっていらっしゃるのを)、かたはらいたくおぼゆれど(引け目に覚えたが)、さすがにあまり卑下してもあらで(それでもむやみに卑下することもなく)、いとよきほどにものなども聞こゆ(当たり障り無く応対申します)。　*「局(つぼね)」は「風俗博物館」サイトの「寝殿造」の説明で、「渡殿（わたどの）」の項に＜透渡殿（すきわたどの）と並んで北側にある通路で、梁間二間と幅が広く、そのうちの北側一間には局（つぼね）（部屋）が設けられる。残る南側一間が通路となり、局と通路の間には格子（こうし）や枢戸（くるるど）がはめられた。局は主に女房などの日常の部屋に当てられた。＞とある。廊下部屋と見て良さそうだ。

「*見し人よりも(あの人よりも)、これは心にくきけ添ひてもあるかな(この女のほうが都会風だな)。などて(如何してこの女は)、かく*出で立ちけむ(このように他家に出て宮仕えしているのだろう)。さるものにて(妻に迎えて)、我も置いたらましものを(私も家内に置いておきたかったのに)」　*「見し人」は常陸姫のことらしいが、薫殿は看取ってはいないので、この「見し」は故人である事を然程は強く意識せずに、「これ」に対して＜見知った→あの＞というくらいの言い方なのだろう。　*「出で立つ」は＜宮仕えする。出仕する。＞だが、是は＜女一の宮に女房仕えしていること＞自体を言っているのだろうか。小宰相君は、どうも薫殿の手の者、源氏の家来筋の家柄の女、のように思える。女一の宮は母である明石中宮の実家である六条院の、さらに言えば祖母筋の紫の上を慕って春の町の東の対に住んでいる。六条院管理は、光君から今の源氏殿が引き継いでいるようだが、女一の宮自身は今上帝の内親王である。家系では朱雀院に連なる。言うまでもなく王家であり、臣下の源氏とは一線を画す。つまり、薫殿から見て、斜め上の＜他家＞である。この「他家」に手の内から＜出た＞という思いを、この「出で立つ」には込めているのではないか。その方が「我も」の文意が立つので、左様に読んで置く。

と思す(と薫殿はお思いになります)。*人知れぬ筋は(この場では故人への哀悼をしみじみ慰める情緒が大事なので、互いに情欲は表に表わさない事を弁えて会っていて)、かけても見せたまはず(薫大将は一切その素振りはお見せになりません)。　*「人知れぬ筋」は注に＜恋情。＞とある。が、小宰相君が薫殿の愛人であることは、初めから「いと忍びて語らはせたまふ」と先に述べられている。大体が、女房の部屋に大将が寄っている事自体が、二人の関係を示しているのだろう。その上で、今の二人は故人を悼む優しさで慰め合う情緒を楽しんでいるので、今この場では＜情欲は見せない＞という取り澄ましというか、ツンデレというのか、を演じるお約束を互いに弁えている、というイヤラシサを示す演出文なのだろう。匂宮の快楽志向も大したものだが、薫殿のこうした淫靡な楽しみ方というのも、なかなか味わい深い。どちらにしても、残された者が精一杯生きるしかないのは、ほぼ生命体原理だ。

[第二段　六条院の法華八講]

*蓮の花の盛りに(蓮の花が咲く盛夏の六月に)、*御八講せらる(中宮主催の法華八講が六条院で催されます)。　*「はちすのはなのさかり」は注に＜季節は夏六月ころに移る。＞とある。蓮は夏の早朝に花を開き昼前につぼみに戻る、らしい。　*「みはっかう」は注に＜明石中宮主催の法華八講。＞とある。「法華八講(ほっけはっこう)」は＜法華経８巻を８座に分け、ふつう１日に朝夕２座講じて４日間で完了する法

会。八講会。八講。＞と大辞泉にある。法華経の講義・講座または勉強会みたいなもんだろうか。この物語ではこの法会場面が盛んに取り上げられている。当時、実際に貴家に於いて盛んだったのだろう。教典の中身に付いては全く分からないが、基本的に仏教は先進の学識ではあったのだろうから、開拓開墾で農業生産が拡大する好況基調にあって、人々はその優れた知見に触れたがっただろうし、法曹界も教義を広める好機として、それは国づくりに寄与するし、自分たちの地位も上がるので、積極的にそうした法会の開催に尽力した、という時代背景だったような気はする。だから、講義と言っても、派手な演出や趣向を凝らした演芸で盛り上がる娯楽要素は恐らく大きくあったのだろう。

六条の院の御ため(ひとつは六条院光君の追善に)、紫の上など(ひとつは紫の上の追善にと)、皆思し分けつつ(講座ごとに法要主旨を設けて)、御経仏など供養ぜさせたまひて(経巻や仏像仏画を奉納なさって)、いかめしく、尊くなむありける(荘厳に行なわれました)。

*五巻の日などは(五巻目の講座となる三日目は)、いみじき見物なりければ(薪行道が面白い見世物だったので)、こなたかなた、女房につきて参りて(あちこちから女房の縁故者ということで会場に参入して)、物見る人多かりけり(見物する人が多数いたのです)。　*「ごくぁんのひ」は注に＜薪行道が行われる日。＞とある。「薪行道(たきぎのぎゃうだう)」は＜法華八講の第3日に、行基作といわれる「法華経をわが得しことは薪こり菜つみ水汲(く)み仕へてぞ得し」の歌を唱えながら、薪を背負い、水桶をになった者を列に加えて、僧たちが行う行道。歌は提婆達多品(だいばだったぼん)中に、仏が法華経を得るため「水を汲み、薪を拾い、食(じき)を設け」て、阿私仙に従ったとあるのに基づく。＞と大辞泉にある。法華経第五巻に「提婆達多品」という話がある、ということらしい。で、高僧が「阿私仙」に扮して先導し、貴公子たちが修行中の釈迦皇子よろしく水桶や薪や菜っ葉を背負って従い、その行列が会場を一回りするという一種の見世物興行だったのだろう。

*五日といふ朝座に果てて(五日目の朝座で法会が終わって)、*御堂の飾り取りさけ(寝殿に設えた仏道講堂の飾り付けを取り外して)、御しつらひ改むるに(元に戻す時に)、北の廂も、障子ども放ちたりしかば(北の廂側も間仕切りが取り払われていたので)、皆入り立ちてつくろふほど(家司の指示で郎党どもが衝立や几帳や屏風などを運び込んで部屋割りを直している間)、*西の渡殿に姫宮おはしましけり(西奥の渡り廊下の小部屋に姫宮はいらっしゃったのです)。　*「いつかといふあさざにはてて」は注に＜法華八講は五日目の朝座で終わる。＞とある。講義は四日で終わって、五日目の朝に今回の講座の総評などで締められる、といったあたりだろうか。　*「御堂の飾り取りさけ」の「取りさけ」は＜取り下げ＞の誤写かと思ったが、「さく」は「離く(離す、放す)」で、「取りさく」は＜取り外す＞という言い方らしい。「みだう」については、注に＜寝殿を御堂に見立てて法華八講が催された。＞とある。　*「西の渡殿に姫宮おはしましけり」はちょっと意外だった。姫宮は東の対に住んでいると私は思い込んでいたが、この言い方からすると、姫宮は寝殿母屋に住んでいたように聞こえる。姫宮は、基本的に作業部屋・準備部屋である北廂に住んでいたはずはないので、男衆が北廂の部屋割りを戻している間は女房たちの居場所が無いし、また片付けの物音で母屋に居ても落ち着かないので、一時的に側近と一緒に渡り廊下の一室で作業が終わるのを待っていた、ということなのだろう。で、このことから推察される春の町の寝殿の間取りは、母屋の東側を后の宮である明石中宮が使い、西側を女一の宮が使っていて、女一の宮の女房たちは西側の北廂および西の対に続く渡り廊下の局に住んでいた、ということになりそうだ。何処かでこの事は

既に説明されていただろうか。それらしい記事もあったような気もするが、私は女一の宮は東の対に住んでいると、なぜか思い込んでいた。

*もの聞き極じて(講義を聴き疲れて)、女房もおのおの局にありつつ(女房も各自の部屋で休んでいて)、御前はいと人少ななる夕暮に(姫宮の御前にはとても人が少なかった夕暮れに)、大将殿、直衣着替へて(大将殿が直衣に着替えて)、今日まかづる僧の中に(今日叡山に帰る僧の中に)、かならずのたまふべきことあるにより(話をなさらなくてはいけない用事があったので)、*釣殿の方におはしたるに(釣殿でお話しなさっていたが)、皆まかでぬれば(その用事も済んで、僧たちが皆引き上げたので)、*池の方に涼みたまひて(池のほとりを涼みがてらに歩きなさって)、人少ななるに(庭から邸内の様子を窺うと、男たちが部屋割りに取り掛かっていて、ずいぶん女房たちが少なそうなので)、　*「もの聞き極じて」は注に＜五日間の法華八講の聴聞に疲労。＞とある。「極ず」は「こうず」と読みがある。「こうず」は古語辞典には「困ず」で＜困る。悩む。疲れる。＞とある。「困ず」の方が読み易い気がするが、疲労困憊の極限ということなら「極ず」の方が感じは出るようにも見える。　*「つりどの」は中門廊から邸内とは反対の南側に庭の池に面した物見建物だから、中門廊から帰る僧を其処で待ち受けて話したのだろう。　*「池の方に」は、釣殿内の池に＜向かって＞面したところではなく、庭へ出て池にそってその＜ほとり＞を歩いた、と読んで置く。この「方に」という言い方からそう読めるということではなく、そう読んだ方が続く「人少ななるに」の「なるに」に＜庭から邸内の様子を窺うと＞を内意できるので、その方が下文への展開に都合が良い、という読者の身勝手な事情によるものだが、むしろ此処の文は大将の動線説明が悪すぎる作者の責をこそ問いたい箇所だ。

「かくいふ宰相の君など(先日話した小宰相君などは)、かりそめに几帳などばかり立てて(この後片付けの最中なら、仮に几帳ばかりを間仕切りにして)、うちやすむ上局にしたり(休憩部屋にしているのは)、ここにやあらむ(このあたりだろう)、人の衣の音す(衣擦れの音がする)」と思して(とお思いになって)、*馬道の方の(庭から局に近づきなさって、馬道を抜けて渡り廊下の下側から)障子の細く開きたるより(襖戸が細く開いている先の部屋の中を)、やをら見たまへば(そっと覗き見なさると)、例さやうの人のゐたるけはひには似ず(小宰相君がいる気配とは違って)、晴れ晴れしくしつらひたれば(模様替えで広々と片付けられていて)、なかなか(道具類がある普段の時よりも)、几帳どもの立て違へたるあはひより見通されて(几帳がいくつか立ててあるだけの隙間から見通されて)、あらはなり(中の様子がはっきり分かります)。　*「馬道の方の障子の細く開きたるよりやをら見たまへば」とは、どういう状況に大将が居る事を示しているのか。「馬道(めだう)」は＜寝殿造りなどで，殿舎と殿舎の間を土間廊下とし，必要なときに馬を引きいれるようにした所。普段は板を敷いておく。後世は長廊下の別称。めんどう。めど。切り馬道。＞と大辞林にある。薫殿は庭に居る。だから、此処で言う「馬道」は正に＜切り馬道＞であり、踏み板を外したか、下を潜ったか、薫大将は庭から静かに西の渡り廊下の小宰相君の局に近づいて、人の気配のする部屋を階下から覗き見た、ということなのだろう。廊下を歩き来たのではないので誰も大将の接近に気付かず、こういう時には都合良く強い体臭も風向きで隠れたか、大将の気配は女たちに気付かれなかった、ということらしい。

氷をものの蓋に置きて割るとて、もて騒ぐ人びと、大人三人ばかり、童と居たり(氷を何かの蓋の上に置いて割ろうとして騒いでいる女が三人ほど童女と居ました)。唐衣も*汗衫も

着ず(女は唐衣、童女は汗衫、といった上着も着ずに)、皆うちとけたれば(皆軽装で和んでいたので)、御前とは見たまはぬに(薫殿は姫宮の御前とはお思いにならなかったが)、*白き薄物の御衣着替へたまへる人の(白い紗織りの着物を着ていらっしゃる人が)、手に氷を持ちながら、かく争ふを、すこし笑みたまへる御顔、言はむ方なくうつくしげなり(手に氷を持ちながら、女たちが言い争うのを少し笑って見ていらっしゃる御顔は、言いようもなく美しいものでした)。　*「汗衫(かざみ)」は「風俗博物館」サイト「日本服飾史－平安」部の「汗衫を着けた公家童女晴れ姿」ページに画像と共に＜汗衫（かざみ）は本来汗のつく内衣［肌着］であって、単のものであったろう。やがて下級者の表衣となり、更に長大化して公家の童女の正装に用いられた。従って本来の汗衫と、公家童女の汗衫とは、形状も自から異るが、単のものであることに変りはない。＞と説明されている。つまり、童女の正装上着。唐衣(からぎぬ)は公家女房の正装上着。　*「しろきうすもののおんぞきかへたまへるひと」は＜女一の宮＞と注にある。また、注には「着替へたまへる」について＜大島本は「き（き＋かへ）給へる」とある。すなわち「かへ」を補入する。『集成』『完本』は底本の訂正以前の本文と諸本に従って「着たまへる」と校訂する。『新大系』は底本の補入に従って「着かへ給へる」とする。大島本は独自異文。＞と解説されている。「着たまへる」に従う。

いと暑さの堪へがたき日なれば(とても暑さの堪え難い日だったので)、こちたき御髪の、苦しう思さるるにやあらむ(長い髪がうるさく思われなさるのか)、すこしこなたに靡かして引かれたるほど(少し外側へ靡かせて背中から離している姿は)、たとへむものなし(例えようもなく艶です)。「ここらよき人を見集むれど(六条院には美人が多いが)、似るべくもあらざりけり(これほどの人は他にいないだろう)」とおぼゆ(と薫殿には思われます)。*御前なる人は(その姫宮の前に控える女房は)、*まことに土などの心地ぞするを(まるで、女の死骸が無い話として常陸姫とも共通する「長恨歌伝」にある官女のように、化粧した顔も土のようにくすんで見劣りする気がしたが)、思ひ静めて見れば(冷静になって良く見ると)、黄なる*生絹の単衣(黄色い生糸織りの単衣に)、*薄色なる裳着たる人の(薄紫色の裳を着けた人が)、扇うち使ひたるなど(扇を使っているのを)、「用意あらむはや(用意が良いことだ)」と、ふと見えて(と、ふと目に付くと)、　*「おまへなるひと」は、語り手としては＜姫宮の前に侍る女房＞という言い方なのだろうが、視点は薫殿目線で語っていて、薫殿はこの人を姫宮とは思っていない、という設定なので、言い換えでもその辺の言い回しには注意させられる。が、本文で「御前」と言っているのだから、言い換えでも＜姫宮の前＞で良いのだろう。　*「まことに土などの心地ぞする」は注に＜『河海抄』は「上の心油然として＊（きょう=心+兄）たること遇へること有るが如し左右前後を顧みるに粉色土の如し」（白氏文集、長恨歌伝）を指摘。＞とある。確かにちょっと極端な表現にも思われるが、姫宮の素晴らしさに比した女房たちの凡庸さを「土」と言ったのだろう、くらいに軽く流したかったが、「長恨歌伝」をウエブ検索したら、いくつかの解説とそれに伴う気懸かりな論文が目に付いた。先ず概要に付いては、明治大学リポジトリ・サーバの「文芸研究」論文にある「袴田光康」氏著作の〔『源氏物語』における「長恨歌伝」の研究〕に＜金沢文庫本『白氏文集』には白氏の「長恨歌」の前に、陳鴻撰として「長恨歌(伝)」が併せて収められている。(中略）紫式部などは、やはり『白氏文集』によって「長恨歌伝」と「長恨歌」を併せて読む形でこれを享受したと推測される。＞とあり、本論の考察文の後に「長恨歌伝」の本文と訓読文も掲載されていた。が、本文に付いては、「下定雅弘の中国文学の回廊」サイトにある公開論文〔『麗情集』「長恨歌伝」と『文集』「長恨歌伝」〕が訳文付きなのと、異文比較で「長恨歌伝」の内容雑観が分かり易かった。で、差し当たって此処の引用箇所を見ると、漢文では「上心油然、

悦若有遇。顧左右前後、粉色如土。」となっていて、訳文は異文の方に振られているが、それを参照して当文に当てると＜天子はうっとりとして、美女に出会ったような気がされた。が、左右前後の官女を見ても、おしろいを塗ったどの顔も土のようにくすんでいる。＞といったところらしい。美女を求める玄宗皇帝が楊貴妃に出会う(直前の)場面のようだ。ところで、白氏文集・巻 12 には自作の叙事詩「長恨歌」の前文として、著者である白居易(はくきょい)の友人である陳鴻(ちんこう)作の散文詩「長恨歌(一般に‘長恨歌伝’と称されて区別される)」が配されていることに、近年特段の注意が払われて来ていないが、この事の意味は重要だと指摘する論文があった。それは、福岡大学リポジトリ・サーバにある藤井良雄・陳翀の共著になる[孫次舟「『長恨歌』と『長恨歌伝』とを読み解く」訳注]および[兪平伯「『長恨歌』と『長恨歌伝』とが伝える疑義」訳注]と題された公開文書である。この二つの論文は、兪平伯が 1929 年に発表した考察文「『長恨歌』と『長恨歌伝』とが伝える疑義」に於いて、兪平伯が指摘した「長恨歌」解釈を基にして、兪平伯本人は「長恨」を＜生き別れの悲しみ＞とし、1982 年に孫次舟がさらに考察を加えて「長恨」を＜楊貴妃の玄宗への怨み＞と説いている、ものらしい。論文は、中国語原文を和訳した翻訳書ということで、私には漢文知識が無いので論旨展開の際の典拠引用は十分には理解できないが、要点は恐らく、「長恨歌」は正史の楊貴妃伝とは別に、当時実しやかに流布していたらしい楊貴妃逃亡説について、その信憑性を信ずるべき好機を白居易と陳鴻が得たので、感じ入った白居易が長編詩の構想を思い付き、その長編詩が正史によって誤解されないように、逃亡説に示される事実経過を陳鴻に前文として書いてもらった、というのが白氏文集の構成説明だ、というのが兪平伯の解釈であるらしい。私としては「長恨歌」自体に深入りする心算はあまりない(それでもこの長編詩が何故「長恨歌」と題されるのか腑に落ちない印象は確かにある)が、兪平伯の着眼点で注目させられたのは、玄宗皇帝は楊貴妃が馬にひき殺される現場を見ていないし、墓には死骸が無い、という事実の指摘だ。この点に付いては正史にも符合するようで、事実の客観性が高い。即ち、この物語での大将と常陸姫の現況を玄宗皇帝と楊貴妃の情況に準える、という作者の構想が成立している、ということは認識すべきらしい。となると、平安期の日本へは「長恨歌」の真意は普通に伝わっていたらしい、ということも新鮮だが、その「長恨歌」を相当に意識して紫式部(かどうかは本当のところ不明だが)は、此処の部分(だけではなく全編に渡っての構想に於いてという指摘もある)の話を構築しているらしく、その限りでは私もそれなりに「長恨歌」に留意せざるを得ないような気がしている。で、そういう作者の意図を踏まえれば、此処の「まことに土などの心地ぞする」の「まことに」がまことに興味深い。
*「生絹(すずし)」は＜生糸で織った絹織物。精練していないので張りがありごわごわしている。せいけん。＞と大辞林にある。　*「薄色」は＜薄紫＞と古語辞典にある。

「なかなか(もう)、もの扱ひに(氷を割るのは)、いと苦しげなり(大変です)。ただ(割らなくて好いから)、さながら見たまへかし(そのまま見て涼みましょう)」

とて(と言って)、笑ひたるまみ(別の女房に笑いかけるその女の目元は)、愛敬づきたり(優しそうでした)。声聞くにぞ(その声で)、*この心ざしの人とは知りぬる(その女房が小宰相君だと薫殿にも分かったのです)。　*「この心ざしの人」は注に＜薫の意中の人、小宰相君。＞とある。

[第三段　小宰相の君、氷を弄ぶ]

心強く割りて(それでも他の女房は、やはり氷を割って)、手ごとに持たり(各自手に持ちました)。頭にうち置き(額に当てたり)、胸にさし当てなど(胸元に差し入れたり)、さま悪

しうする人もあるべし(行儀の悪い人もいるようです)。*異人は(そうした女房とは違って嗜みある小宰相君は)、紙につつみて(氷を紙に包んで)、御前にもかくて参らせたれど(貴女の御前にもどうぞと差し上げたが)、いとうつくしき*御手をさしやりたまひて(女一の宮と思われるその貴女は、それは美しい御手を差し出して)、*拭はせたまふ(小宰相君にその氷紙で拭かせなさいます)。　*「ことびと」は＜別の人。余所の人。＞と分け隔てする語用のようだが、此処では小宰相君を他の女房とは一線を画す＜嗜みある女＞と言っている、と取って置く。で、薫殿はその小宰相君が敬う貴女を＜女一の宮＞と推測した、という文意になりそうだ。　*「御手」は「みて」と読みがある。この時点で薫殿は、この貴女を姫宮と確信した、と読んで置く。　*「のぐはせたまふ」は注に＜「せ」使役助動詞。女房をして。＞とある。その女房とは、氷を紙に包んで持っている小宰相君なのだろう。

「いな、持たらじ(いえ、私は氷を持ちません)。雫むつかし(雫が嫌です)」

とのたまふ御声(と仰る姫宮の御声を)、いとほのかに聞くも(とてもかすかに聞くのも)、限りもなくうれし(薫殿には限りなく嬉しいのです)。「まだいと小さくおはしまししほどに(まだ宮がごく小さくいらっしゃった特に)、我も、ものの心も知らで見たてまつりし時(私も無心でお会い申し上げて)、めでたの稚児の御さまや(何と可愛らしい幼女の御姿)、と見たてまつりし(と拝し申したものだ)。その後、たえてこの御けはひをだに聞かざりつるものを(その後は絶えて御様子もお聞きしなかったが)、いかなる神仏の(どういう神仏の計らいで)、かかる折見せたまへるならむ(こういう機会をお見せなさるのか)。例の(またも私を)、やすからずもの思はせむとするにやあらむ(恋の煩悶で試すお心算か)」

と、かつは静心なくて(と、どこかでは落ち着かない気分もして)、まもり立ちたるほどに(じっと見詰めて立っていると)、こなたの対の北面に住みける下臈女房の(この西の対の北廂に住んでいる下級女房が)、この障子は(此処の襖戸を)、とみのことにて(急な用で呼ばれて)、開けながら下りにけるを思ひ出でて(開けたまま部屋に下がっていたのを思い出して)、「人もこそ見つけて騒がるれ(誰かに見つかったら叱られる)」と思ひければ(と思ったので)、惑ひ入る(慌てて戻って来ます)。

この直衣姿を見つくるに(そして、階下に居る薫殿の直衣姿を見つけると)、「誰ならむ(誰だろう)」と心騒ぎて(と胸騒ぎして)、おのがさま見えむことも知らず(自分が外から丸見えなのも気にせず)、簀子よりただ来に来れば(縁側をどんどん近づいてくるので)、ふと立ち去りて(薫殿は素早く立ち去って)、「誰れとも見えじ(誰とは知られまい)。好き好きしきやうなり(物好きの覗き見のようで格好が悪い)」と思ひて隠れたまひぬ(と思って隠れなさいました)。

この御許は(その女房は)、

「いみじきわざかな(これは大変だ)。御几帳をさへあらはに引きなしてけるよ(御几帳まで露わに引き上げていたなんて)。右の大殿の君たちならむ(右大臣のご子息に違いない)。疎き人(他家の人は)、はた、ここまで来べきにもあらず(また、此処まで入っては来られな

いはずだ)。ものの聞こえあらば(部屋が覗かれたと噂が立てば)、誰れか障子は開けたりしと(誰が障子を開けていたのかと)、かならず出で来なむ(必ず調べられる)。単衣も袴も(直衣姿の殿方は着物も袴も)、生絹なめりと見えつる人の御姿なれば(太い糸の荒織りのようだった御装束だったので)、え人も聞きつけたまはぬならむかし(動いても衣擦れの音もせずに、女房殿たちは誰も気付きなさらなかったらしい)」　*「ひとへもはかまもすずしなめり」は注に＜薫の装束。生絹は薄く軽いので衣擦れの音がせず、その接近に気づかれない。＞とある。

　と思ひ極じてをり(と思って困りきっていました)。

　*かの人は(斯く言う薫殿は)、「やうやう聖になりし心を(次第に仏心に染まった心を)、ひとふし違へそめて(姉君への恋心で、一度間違えてからは)、さまざまなるもの思ふ人ともなるかな(いろいろと俗世に悩む身になったものだ)。そのかみ世を背きなましかば(その昔に出家していたら)、今は深き山に住み果てて(今は深い山に住みついて)、かく心乱れましやは(このように心乱れることはなかっただろう)」など思し続くるも(と思い続け為さってみても)、やすからず(姫宮に湧く興味は収まりません)。「*などて(どうしてこんな消極的な私が)、年ごろ、見たてまつらばやと思ひつらむ(この何年もずっと、この姫宮には、お会い申したいと思って来たのだろう)。なかなか苦しう(会ったところで叶わぬ恋なら、却って辛く)、*かひなかるべきわざにこそ(実らぬ間柄なのだから、思ってみても仕方がない)」と思ふ(と思うのです)。　*「かの人」は注に＜『完訳』は「薫の視点に沿って語ってきた語り手は、「かの人」として距離を置き、その心中を語り直す」と注す。＞とある。確かに分かり難い。距離を置くなら、いっそ＜大将殿＞とか＜薫殿＞とかの固有名詞か、せめて＜殿＞あたりの一般名詞を使ってもらいたい。ただ是は、そこまで離れ切ってはいない、という語り手の気分というよりは、「かの」で＜その、当の＞くらいの言い方をして話をまとめる語用のようで、それは今でも使う語用ではある。　*「などて」は＜叶わぬ恋なのに、どうして私は＞という言い方だろうが、薫殿が女一の宮を諦める理由は何なのか。私的な理由としては、忌まわしい出生事情を持つ薫殿が、その因果を自覚して自分には子を設けて血筋を繋ぐ資格が無い、と思って出家を考えた、ということがありそうだが、現に女二の宮と薫殿は結婚してしまっている。子が出来ていないのは、偶々なのか、どちらかか双方に不妊体質があるのか、結婚した以上は情交が無いでは不実の誹りを受けるはずなので、今で言う計画避妊は当時では実際にも社会規範上も有り得ないだろう。確かに、女二の宮は藤壺女御腹で源氏薫殿との血縁は遠い。明石中宮は表向きは薫殿の実の姉なので、その御子の女一の宮は建前上の血縁は近い。それが尚更、二人の婚姻を妨げるかも知れない。が、それはむしろ勢力関係上で、身内と見做される血縁関係という意味で、婚姻自体が不可能という意味ではなさそうだ。ただ、此処で一点、薫殿が女一の宮に執心する血縁上の事情があるとすれば、実質で薫殿は光君に繋がっていないので、それが精神的な不安定さの根に有るからこそ、光君に繋がる血筋としての女一の宮に拘る、という切実さはあるのかも知れない。が、その執心こそは本質的に現世執着そのものであり、仏心からは遠い。それに、今回の常陸姫の不幸にしても、薫殿に女の人生を左右した責任は必ず有るのであって、その事実からしても薫殿の仏心は決して固くない。となると、女一の宮との結婚には、実質での公的な障害理由があると考えざるを得ない。理屈では、女一の宮は今上帝の切り札である。武力以外に解決できない国体の維持に窮した場合、権力実態は変わるが、対抗する有力者と縁戚関係を結んで、対立構造自体の解消を図るという最後の一手が、この姫宮との縁組である。そうすれば、その対抗家は身内となって、その家から帝に女御を送り込める。その女御が男子を産めば、帝位は乗っ取れる、という

仕掛けなので、対抗勢力も納得する事が期待できる。対抗勢力がこの提案を受け入れるには、勢力情勢の判断に於いて五分五分か、相手が有利でも姫宮の評判が高ければ、相手も出来るだけ損害を少なく出来る交渉には応じるだろう。そういう危機的場面に備えて、女一の宮は温存する。また場合によっては、斎宮や斎院として帝の代行を勤めさせる。だから、独身で終わる内親王は多い。みたいなことが、この物語でも朱雀帝をして語られていた。しかし、男と女である。薫殿が強引に女一の宮に迫るなり、犯すなどすれば、円満に事が運ぶかどうかはさて置き、全く結婚の目が無いとは言い切れない。つまりは、外形的な困難さを押して迫るような私ではないのに、なぜ私はこの姫宮に執着するのか、みたいな身勝手な格好を付けた言い草を薫殿は言っている、ように私には見えるが、どうなんだろう。いや、ちょっと気になる好い女、みたいな対象は誰にでもあるだろうが、それは思い悩むほどの重さではない。此処の文意は何か大事なことを言っているような気もするが、此処の字面からだけでは、どうという手応えはない。　*「かひなかるべきわざにこそ」は＜どうせ結婚できない血縁関係なのだから、思ってみても仕方がない＞という言い方と取って置くが、本当に実るかどうかは薫殿が何処まで本気で姫宮に迫るかによって決まるように思える。つまり、恋なんてものは、自分で制したら、他に誰も強要しない事柄なので必ず制されるに決まっている。だから、これは理屈になっていない。何を言っているのか、と思ったら、結びは「と思ふ」である。薫殿は理屈を言っているのではなく、自分の気持ちを持て余しているだけらしい。そういうことなら、何を如何思おうと個人の自由勝手だ。が、この薫殿と言う人は、関わった女が思い悩んで入水したと言うのに、まだこんな戯言を言ってフワフワしているのか。こういう姿勢こそ、正に若々しく「好き好きしきやうな」るものに他ならず、同じ浮気性なら本気になる分だけ匂宮の方が増しにさえ見えてくる。それならいっそ、弱い立場の常陸姫なんかじゃなく、女一の宮を浚ってみたら如何なのか、と薫殿に言いたくなるのは私だけではないだろう。しかし、ちょっと面倒な女にはグズグズする、という薫殿は、身分も高く見映えもする人も羨む立場なので、多くの男の反感を買いそうだが、その実、身分も低く見栄えもしない多くの男の実態ではありそうで、奔放そうな匂宮よりは憎めない。

［第四段　薫と女二宮との夫婦仲］

つとめて（その翌朝）、起きたまへる*女宮の御容貌（お起きになる妻の女二の宮のお顔立ちを）、「いとをかしげなめるは（昨日垣間見た女一の宮はとてもお美しそうだったが）、これよりかならずまさるべきことかは（この女二の宮よりそんなに優れていただろうか）」と見えながら（と思われたが）、「*さらに似たまはずこそありけれ（いや、ぜんぜん似ていらっしゃらなかった）。あさましきまであてに（女一の宮は驚くほど尊く）、えも言はざりし御さまかな（何ともいえない御姿だった）。*かたへは思ひなしか（でももしかすると意外なところで見掛けた気の所為か）、折からか（風変わりな場面だったからだろうか）」と思して（と薫殿はお思いになって）、　*「をんなみや」は＜妻である宮＝女二の宮＞。注には＜女二宮女一宮の異母妹、母は麗景殿女御。＞とある。が、女二の宮は宿木巻一章一段に「そのころ藤壺と聞こゆるは故左大臣殿の女御になむおはしける。まだ春宮と聞こえさせし時、人より先に参りたまひにしかば、睦ましくあはれなる方の御思ひは、ことにものしたまふめれど、そのしるしと見ゆるふしもなくて年経たまふに、中宮には宮たちさへあまた、ここら大人びたまふめるに、さやうのこともすくなくて、ただ女宮一所をぞ持ちたてまつりたまへりける。」と語られていて、藤壺女御腹である。注に＜母は麗景殿女御＞とあるのは、上の引用文に「まだ春宮と聞こえさせし時、人より先に参りたまひにし」とあるので、この藤壺女御は今上帝が東宮の時に明石姫に先立って入内した「左大臣殿の三の君参りたまひぬ。麗景殿と聞こゆ」（梅枝巻二章二段）とあった麗景殿女御と同一人物だ、

ということに拠るのだろうが、即位した今上帝はこの女御を藤壺に遇したのだから、やはり藤壺女御腹というべきだろう。いずれ故人なので大きな問題ではないかもしれないが、逆に存命なら絶対に麗景殿女御とは言えないはずだ。　*「さらに似たまはずこそありけれ」の結びの助動詞「けり」は＜そういうことだったのか＞と過去の事象の意味に今気付いた驚きを示す言い方で、この文は＜さらに似たまはずにありけり＞という発見を＜こそあれ＞の強調文型でいっそうの驚きを以て表現しているので、「さらに」は＜ぜんぜん＞ではなく＜いいや、ぜんぜん＞くらいの言い方なのだろう。　*「かたへは」は＜一面では→ある見方では→あるいは、もしくは、もしかすると＞。

「いと暑しや(いやに暑いな)。これより薄き御衣奉れ(もっと薄い着物を着なさいよ)。女は、例ならぬ物着たるこそ(女は変わった物を着ると)、時々につけてをかしけれ(時節の風情があるものです)」とて(と言って)、「*あなたに参りて(母宮の御部屋方に参って)、*大弐に、薄物の単衣の御衣、縫ひて参れと*言へ(大弐に紗の単衣の御着物をこの宮のために縫って持って来るように言いなさい)」とのたまふ(と御自分の側近女房に仰います)。　*「あなたに参りて」は注に＜「あなた」は薫の母女三宮方をさす。「参る」の主語は女房。＞とある。　*「だいに」は注に＜女三宮方の女房で衣服調達係の女房。＞とある。　*「言へ」は近しいので自分の側近女房に言いつけたのだろう。

*御前なる人は(女宮の側近女房は)、「この御容貌のいみじき盛りにおはしますを(宮の御姿がとても艶でいらっしゃるのを)、もてはやしきこえたまふ(殿は愛でていらっしゃる)」とをかしう思へり(と楽しく思いました)。　*「御前なる人」は注に＜女二宮の御前。＞とある。

例の(それから薫殿はいつものように)、念誦したまふわが御方におはしましなどして(日課の読経をお挙げなさる為に御自分の御部屋にいらっしゃっていて)、昼つ方渡りたまへれば(昼頃に女宮の御部屋に来ていらっしゃると)、のたまひつる御衣(仕立を言い付けなさっていた御着物は)、御几帳にうち掛けたり(御几帳に打ち掛けられてありました)。

「なぞ、こは奉らぬ(なぜこれをお召しにならないのですか)。人多く見る時なむ(人目が多い時なら)、透きたる物着るは(透けた着物を着るのは)、ばうぞくにおぼゆる(下品に思えますが)、ただ今はあへはべりなむ(今はちょうど好いでしょう)」　*「ばうぞく」は＜(形動ナリ)〔「放俗」とも,「凡（はん）俗」の転とも〕品が悪いこと。無遠慮なこと。＞と大辞林にある。

とて、手づから着せ奉りたまふ(と言って薫殿は御自分で女宮にお着せ申しなさいます)。御袴も昨日の同じ紅なり(御袴も昨日の女一の宮のと同じ紅です)。御髪の多さ、裾などは劣りたまはねど(御髪の多さとその裾に広がる美しさは姫宮に劣っていらっしゃらないが)、なほさまざまなるにや(やはりそれぞれ別物で)、似るべくもあらず(似ているはずもありません)。氷召して、人びとに割らせたまふ(薫殿は氷を用意させて、女房たちに割らせなさいます)。取りて一つ奉りなどしたまふ(そして、その欠片を一つ取って女宮に差し上げてみたりなさいます)、心のうちもをかし(そんな風に昨日の光景の真似事をしている自分が、薫殿は内心で滑稽なのでした)。

「*絵に描きて、恋しき人見る人は(絵にして恋しい人を思う人は)、なくやはありける(白楽天の李夫人にある武帝のように、昔から居る)。ましてこれは(ましてこの女宮は)、慰めむに似げなからぬ御ほどぞかしと思へど(姫宮の代わりに慰められるに似つかわしくはない御姉妹だろうと思うが)、昨日かやうにて(昨日こそこのように)、我混じりゐ(自分があの部屋に交じって)、心にまかせて見たてまつらましかば(心行くまで姫宮を拝顔申したかった)」とおぼゆるに(と思えて)、心にもあらずうち嘆かれぬ(思わず嘆息なさいます)。　*「絵に描きて～」は注に＜以下「見たてまつらましかば」まで、薫の心中の思い。『異本紫明抄』は、『白氏文集』巻四「李夫人」を指摘。＞とある。「白居易/李夫人」でウエブ検索すると、「有縁ネット」ブログの「１０１３中国の三面記事を読む（４００）「傾国傾城」の美女と最初に言われたのは誰？」という翻訳記事に＜≪漢書≫の中の李延年の≪佳人歌≫が、「傾国傾城」の一番早い文字の記載と言える。歌っているのは、漢の武帝の李夫人のことである。＞とあった。この記事には白居易の≪李夫人－鑒嬖惑也≫詩文と≪漢書・外戚傳≫の漢文掲載もあったが、私は漢文は読めないので専ら翻訳文を頼る。と、李夫人のあらましは≪漢書・外戚傳≫(前漢書・外戚傳第六十七の孝武李夫人の項の抄訳らしい)翻訳文によると、＜宮廷楽人の李延年が美しい妹の事を「佳人歌」という歌にして武帝に聞かせた所、興味を持って妹に会い、気に入って夫人にした。が、その李夫人は若くして病死した。武帝は彼女を悼んで甘泉宮に彼女の肖像画を掛けて悲しみに暮れた。＞(拙再抄訳)ということらしい。この記事はさらに面白い内容が続くが、本項からは逸れるので省く。で、白居易の詩はこの武帝の悲嘆のさまを語り、「反魂香」の夢に耽って現を抜かす羽目に陥るので、先に見た「人非木石皆有情、不如不遇傾城色。」と結ばれる、との事。「絵に描きて恋しき人見る」は、白居易≪李夫人≫詩文では三段目五句・六句の「君恩不盡念不已、甘泉殿裏令寫眞。」に当たる。詩文では、しかし絵では満たされない、と武帝の悲嘆が続くようだが、これ以上は触れない。

「*一品の宮に、御文は奉りたまふや(女一の宮に御手紙を差し上げなさいますか)」　*「一品の宮(いっぽんのみや)」は注に＜薫の詞。一品宮は女一宮。＞とある。公式な呼称ではないだろうが、広く通称されそうな気もする。

と聞こえたまへば(と薫殿がお聞きなさると)、

「内裏にありし時(うちにありしとき、御所に居た時に)、主上の(うへの、父帝が)、さのたまひしかば聞こえしかど(そのように仰せでしたので、差し上げましたが)、久しうさもあらず(久しくは出していません)」

とのたまふ(と女宮はお応えなさいます)。

「ただ人にならせたまひにたりとて(臣下に下りなさったからと言って)、かれよりも聞こえさせたまはぬにこそは(内親王から御手紙がないとしたら)、心憂かなれ(心外です)。今(今度)、大宮の御前にて(中宮の御前に)、恨みきこえさせたまふ(あなたが不満にお思いだ)、と*啓せむ(と申し上げよう)」　*「啓す(けいす)」は皇后に＜申し上げる＞時の言い方らしい。天皇には「奏す(そうす)」というそうだ。如何にも漢学っぽい。

とのたまふ(と薫殿は仰います)。

「いかが恨みきこえむ(不満になど思っていません)。うたて(とげとげしい)」

とのたまへば(と女宮が仰ると)、

「下衆になりにたりとて(身分が下がったから)、思し落とすなめり(軽んじていらっしゃるのだろう)、と見れば(と思って)、おどろかしきこえぬ(御手紙を差し上げないのです)、とこそは聞こえめ(とでも申し上げて置こう)」

とのたまふ(と薫殿は仰います)。

[第五段　薫、明石中宮に対面]

その日は暮らして(その日はそのように遣り過ごして)、またの朝に大宮に参りたまふ(翌日の朝に薫殿は六条院の中宮のところへ参上なさいます)。例の、宮もおはしけり(いつものように兵部卿宮もいらっしゃいました)。*丁子に深く染めたる薄物の単衣を(丁子に深く染めた絽の単衣を)、*こまやかなる直衣に着たまへる(濃い縹色の直衣の下にきていらっしゃっる宮は)、いとこのましげなる*女の御身形のめでたかりしにも劣らず(とても気の利いていた一昨日の姫宮の御姿の素晴らしさにも劣らず)、白くきよらにて(色白で端然として)、なほありしよりは面痩せたまへる(また以前よりは頬が痩せていらして)、いと見るかひあり(実に見栄えがします)。　*「丁子(ちゃうじ)」染めは＜赤味のある黄色＞か＜肌色＞くらいが多そうだが、「深く染めたる」とあるので＜茶＞に近いのかも知れない。いや、むしろ色より香りが深いのだろうか。　*「こまやか」は＜濃色だ＞ということらしいが、訳文には＜濃い縹色＞とある。「縹色(はなだいろ)」はざっと＜青色＞で、ウィキペディアには「藍で染めた色」とある。なぜ、「縹色」と言えるのかは分からないが、「法衣の色」というウエブページに＜「縹色」と「柑子色(こうじいろ、ミカン色)」＞が紹介されていて、「柑子色」って「丁子色」に近いかも、なんて思った。で、取り合わせは悪く無いように見えたので、何となく従う。濃縹(こきはなだ)または深縹(ふかきはなだ)は色見本だとほぼ＜紺＞で、かなりジーンズに近い。　*「をんなのおおんみなり」は注に＜女一宮の身なり。『完訳』は「「女」の呼称は、恋情をこめた表現である」と注す。薫の心中を通しての叙述。＞とある。話の流れとしては、こういう言い方も分かるような気もするが、せめて＜一日の＞とか＜先の＞くらいの説明が無いと何のことだか分かり難い。

おぼえたまへりと見るにも(匂宮に姫宮が似ていらっしゃると思うだけで)、まづ恋しきを(恋しくなるのを)、いとあるまじきこと、と静むるぞ(いけない気持ちだと抑えるのが)、ただなりしよりは苦しき(御姿を見る前よりは苦労します)。絵をいと多く持たせて参りたまへりける(匂宮は絵をとても多く従者に持たせて参上なさっていました)。女房して(それらの絵を女房をして)、あなたに参らせたまひて(姫宮の御部屋に運ばせなさって)、渡らせたまひぬ(宮自身も其方へ向かいなさいました)。

*大将も近く参り寄りたまひて(薫大将も匂宮に続いて中宮を見舞って近く寄り申しなさって)、御八講の尊くはべりしこと(御八講が有難かった事や)、いにしへの御こと(追善された光君や紫の上の昔話などを)、すこし聞こえつつ(少しお話し申しつつ)、残りたる絵見た

まふついでに(此処に残っていた絵を御覧になりながら)、　*「だいしゃうも」と、此処で薫殿を「大将」と官職名で呼称するのは、語り手自身の女房目線で、薫殿の皇后に対する臣下としての立場を示しているのだろうか。しかし、皇后から見て薫殿は実弟の源氏君という続柄であり、薫殿は故藤原衛門督と入道宮との不義の子なので光君の実子ではない、という事情も皇后は関知していない、という設定になっているだろうから、皇后の認識としても薫殿を実弟として親しんでいるはずで、此処は身内同士の和んだ場面に見えるし、であれば、語りも堅苦しい公的な立場を示すとは思えない。多分、この六条院源氏家に於いて、家族の男子はそれぞれが高官あるいは重責に就いている事が普通で平和な状態なのであって、薫殿が「右大将」という重責に就いていることが、家庭事情としても世情としても安寧で、だから皇后の立場で実弟を「大将」と認識することは私的な親しみと同時に公的な責任を果たしている満足感をも得られるように見える。だから語り手は、この場の権威者である皇后の目線で、しかし皇后の気持ちではなく、客観的な事象認識として、述べようとするのが受身に過ぎない第三者の立場としては最も無理が無い。この語り手の姿勢を示す語用こそが「大将も」の「も」という匂宮に続いて薫殿の見舞を受ける列挙の係助詞なのだろう。是は当時の読者には当たり前の感性だったのかもしれないが、私にはとても分かり難い語用だ。

「この里にものしたまふ*皇女の(私の里家にいらっしゃる帝の御息女が)、雲の上離れて(臣籍降下して)、思ひ屈したまへるこそ(自尊が削がれ、気落ちしていらっしゃるのが)、いとほしう見たまふれ(お労しく拝されます)。姫宮の御方より(姫宮様から)、御消息もはべらぬを(御手紙もございませんのを)、かく品定まりたまへるに(このように皇籍離脱した身ゆえに)、思し捨てさせたまへるやうに思ひて(お見捨てあそばしたように思って)、心ゆかぬけしきのみはべるを(無念そうにばかりしておりますので)、*かやうのもの(こうした絵などを)、時々*ものせさせたまはなむ(姫宮様から時々お見せ下さいましたら、どんなに慰められましょう)。なにがしが*おろして持てまからむ(私に頂戴して持ち帰ったのでは)、はた、見るかひもはべらじかし(特には妻の光栄になりません)」　*「皇女」は「みこ」と読みがある。女二の宮は臣下の薫殿に嫁いだのだから、臣籍降下して皇籍離脱している。が、女二の宮自身が王家血筋であることは生涯変わらない。だから臣籍降下しても宮様に変わりはない。が、内親王ではなくなった。ややこしいので、此処の「みこ」は「皇女」よりは＜御女・御子＞の方が無難に思える。また、与謝野訳文に＜宮さん＞とあるのは妥当に見えるが、やはり「みこ」の語感からはズレル気もする。と言っても、女二の宮は明石中宮腹ではないので＜あなたの御女＞でもなく、取り敢えず＜上の御女＝帝の御息女＞として置く。　*「かやうのもの」は注に＜絵をさしていう。＞とある。確かに、上文に「残りたる絵見たまふついでに」とある。　*「ものせさせたまはなむ」の二重敬語は臣下から王族に使われる。即ち、主語は「姫宮の御方」。また、「たまはなむ」は「たまふ」の未然形に期待意の係助詞「なむ」が付いているので、仮定願望の＜～して下さったらなあ＞という言い方で、下に＜さも慰む＞とかが省かれているのだろう。　*「おろす」は＜払い下げる＞または受ける立場からは＜頂く、頂戴する＞。薫殿に賜わって、薫殿から女二の宮へ渡したのでは、上から賜わる光栄は薫殿が受けてしまって、女宮は日蔭のままだ、という言い方らしい。

とのたまへば(と仰ると)、

「あやしく(変な事を)。などてか捨てきこえたまはむ(どうして姫宮が女二の宮を見捨て申しなさいましょう)。*内裏にては(女二の宮が御所にいらっしゃった時には)、近かりしに

つきて(同じ帝の御女同士として近しく思えて)、時々も聞こえたまふめりしを(時々も文通なさったのでしょうが)、所々になりたまひし折に(結婚なさった後は、また別々の家住まいと意識されて遠慮があり)、とだえたまへるにこそあらめ(途絶えていらっしゃるのでしょう)。今(御二人の中に疎遠なお気持ちはないでしょうから、すぐに)、そそのかしきこえむ(姫宮には御手紙を書くようにお勧め申します)。*それよりもなどかは(そちらからも、どうしてお出しなさいませんのか)」　*「うちにてはちかかりし」というのは如何いうことを指しているのか。女一の宮は母の実家である六条院に暮らしている。女二の宮も母の藤壺女御の実家である故左大臣家で暮らしていた。が、「十四になりたまふ年」(宿木巻一章二段)とは今から三年前だが、「女御、夏ごろ、もののけにわづらひたまひて、いとはかなく亡せたまひぬ」(同左)となり、「宮は、まして若き御心地に、心細く悲しく思し入りたるを、聞こし召して、心苦しくあはれに思し召さるれば、御四十九日過ぐるままに、忍びて参らせたてまつらせたまへり」(同左)となっていた。そして、今上天皇は薫君(当時は中納言)に女二の宮の降嫁を打診するが、宇治姉君の早世に気落ちしていた薫君に婚意は無く、「されど、その年は変はりぬ」(宿木巻一章五段)とあった。そして翌年は、薫君を婿取りしようと考えていた源氏殿が、帝が降嫁の打診をなさったことで六姫の婿を匂宮に決めて、匂宮と六姫の婚儀が整う内に、薫君は相変わらず姉君の形代を求めつつ、女二の宮との結婚にはグズグズしたまま「はかなくて年も暮れぬ」(宿木巻七章七段)とあった。しかし、帝の御意向は変わらず、新年が明ける、ということは昨年の春だが、と共に着々と結婚準備は進み、その一環として内親王を迎えるに相応しい身分にする為の人事として薫君は「如月の朔日ごろに、直物とかいふことに、権大納言になりたまひて、右大将かけたまひつ」(宿木巻八章一段)という栄達を果たした。そして遂に「その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着の事ありて、またの日なむ、大将参りたまひける」(宿木巻八章三段)という運びとなった。実際に女二の宮が三条宮邸に移ったのは「夏にならば、三条の宮塞がる方になりぬべし」と定めて、四月朔日ごろ、節分とかいふことまだしき先に、渡したてまつりたまふ」(宿木巻八章六段)という事情で、女二の宮は一昨年は丸一年を御所で暮らしていたことになる。だから、その当時の手紙は御所と六条院とで交わされる。故左大臣家と六条院との距離が、御所と六条院との距離より遠いとは考え難い。だから、この「近かりし」は＜場所の距離＞ではなく、女二の宮が御所住まいになったことで、他家同士で暮らしている時よりも同じ帝の御女として意識される＜関係性の距離＞を言っているのだろう。で、一度近しく意識しあった仲だが、また「所々になりたまひし折に」縁遠く思われた、というような言い方を明石中宮はしているのだろう。　*「それよりもなどかは」は注に＜女二宮のほうから。「などかは」の下に「聞こえたまはざらむ」などの語句が省略された形。＞とある。

と聞こえたまふ(と中宮は仰います)。

「かれよりは(あの人の方からは畏れ多くて)、いかでかは(どうして差し上げられましょう)。*もとより数まへさせたまはざらむをも(女二の宮は元々皇后の御子としてはお数えなさらない縁筋なのを)、かく親しくてさぶらふべきゆかりに寄せて(私が弟として、このように親しくお仕え申せます縁で)、思し召し数まへさせたまはむをこそ(御心を掛けて頂ければ)、*うれしくははべるべけれ(さぞ女宮も嬉しく存じられましょう)。まして(まして姫宮には)、さも聞こえ馴れたまひにけむを(以前は親しくして頂けたのを)、今捨てさせたまはむは(今はお見限り為さるのは)、からきことにはべり(辛い事なのです)」　*「もとより数まへさせたまはざらむ」の主語は明石中宮で、女二の宮が別腹だという意味のようだが、こういう言い方は女宮に

対しては勿論だが、それは妻のことなので謙遜も有り得るにしても、何より帝に対して、不遜にならないのだろうか。傍目には、この場面はまるで、我ら源氏あってこその帝位だ、と言っているように聞こえるが。　＊「うれしくははべるべけれ」の主語は女二の宮で、だから「べけれ」という仮定推量の言い方になる。これが薫殿自身の気持なら、ずいぶん惚けた言い方だ。

と啓せさせたまふを（と薫殿が言上なさるのを）、「好きばみたるけしきあるか（姫宮への好奇心から言っているのか）」とは思しかけざりけり（とは皇后は思いも寄りなさいませんでした）。

立ち出でて（薫殿は中宮の御部屋を辞して出て）、「*一夜の心ざしの人に会はむ（先日会い損ねた小宰相君に会おう）。ありし渡殿も慰めに見むかし（あの日の廊下も懐かしく見たいし）」と思して（とお思いになって）、御前を歩み渡りて（南表の縁側を通って）、*西ざまにおはするを（西の渡り廊下に向かい為さるのを）、御簾の内の人は心ことに用意す（寝殿西面の御簾内にいる女一の宮の女房たちは、その立派な御姿にハッとします）。　*「ひとよのこころざしのひと」は注に＜小宰相君をさす。＞とある。「心ざしの人」は二段にも「この心ざしの人」と小宰相君を示す言い方があった。で、「一夜」とは御八講の最終日五日目の夕方のことらしく、前掲二段に「御前はいと人少ななる夕暮に、～（中略）～、かくいふ宰相の君など、かりそめに几帳などばかり立てて、うちやすむ上局にしたり、ここにやあらむ、人の衣の音す」とあって、薫殿はその先日に小宰相君としんみり故人を悼んで会っていて、今回は法要開けの華やぎもあってか、少し浮かれ気分で戯れたいと思ったようで、局に近寄ったら思いも掛けず姫宮を垣間見ることになった、ということだった。　*「西ざまにおはする」は、小宰相君の局が西の渡り廊下にあるので、薫大将は其方へ向かった、ということだろうが、この「西様」という語自体は＜寝殿の西表＞を言っているのかも知れない。下の「御簾の内の人」とは＜西表にいる女一の宮の女房たち＞だろうから。

げに（女房たちの目を引くのも尤もなほど）、いと様よく限りなきもてなしにて（薫大将は実に姿良く上品な態度をしていて）、渡殿の方は、*左の大殿の君たちなど居て、物言ふけはひすれば（渡り廊下には源氏大臣の子息たちがいて女房たちと話しているようなので）、妻戸の前に居たまひて（廊下へは進まずに、寝殿の出入口の前にお座りになって）、　*「ひだりのおほとの」は源氏大臣のことだろうが、此処では＜左大臣＞とあり、同時期の話がある別の巻では＜右大臣＞とあって、確かに大臣という重鎮の地位の扱いがひどく乱暴だ。ちょっと面倒なので＜大臣＞で済ませて置く。

「おほかたには参りながら（平素から此方には参上いたしますが）、*この御方の*見参に入ることの（此方の御部屋の姫宮にお目に掛かることは）、難くはべれば（出来ませんので）、いとおぼえなく（この辺りはどうも不慣れで）、*翁び果てにたる心地しはべるを（間誤付いて、すっかり老いぼれてしまった気がしますが）、今よりは（また心機一転）、と思ひ起こしはべりてなむ（と気を取り直しまして、遣って来ました）。ありつかず（珍客だと）、若き人どもぞ思ふらむかし（あなた方は思うのでしょうが）」　*「このおおんかた」は注に＜女一宮。＞とある。寝殿の南西の妻戸口に座して＜此方の御部屋＞と言うのだから、確かに＜姫宮＞の事を言っているようだ。　＊「見参に入る（げんざんにいる）」は＜お目に掛かる＞だが、身内の目下（とはいえ年齢では甥たちの方が上だろ

うが)に当たる貴公子たちに、こういうワザと畏まった言い方をするのは、照れからか道化て見せているのだろう。　*「おきなびはつ」は＜すっかり老い呆れる＞。

と(と言って)、甥の君たちの方を見やりたまふ(甥の貴公子たちの方を見遣りなさいます)。

「今よりならはせたまふこそ(今から此方へのご来場にもお慣れになれば)、げに若くならせたまふならめ(きっと若返りなさいましょう)」

など、はかなきことを言ふ人びとのけはひも(などと軽口で応じる女房たちの姿も)、あやしうみやびかに(何とも優雅で)、をかしき御方のありさまにぞある(情趣深い姫宮の人柄が偲ばれます)。そのこととなけれど(薫殿は小宰相君に特に用事はなかったが)、世の中の物語などしつつ(世間話をして)、しめやかに、例よりは居たまへり(静かに、いつもよりは長居なさいました)。

[第六段　明石中宮、薫と小宰相の君の関係を聞く]

姫宮は、*あなたに渡らせたまひにけり(姫宮は東面の母宮の御部屋に行きなさいました)。*「あなたに」は注に＜寝殿東面の中宮のもとに。＞とある。中宮の居間が＜寝殿東面＞と明示されたのは此処が初めてかも知れない。と言っても本文ではなく注釈でのことだが、それでも別に隠し事じゃないんだから、舞台配置はなるべく事前に説明してもらいたい。

大宮(母宮の皇后は)、「大将のそなたに参りつるは(大将が其方へ参りませんでしたか)」と問ひたまふ(とお尋ねになります)。

御供に参りたる*大納言の君(姫宮の側近上臈の大納言の君が)、　*「大納言の君」は大納言の家柄の女一の宮付きの側近上臈なのだろう。

「小宰相の君に(大将殿は小宰相君に)、もののたまはむとにこそは(お話しなさる事が)、はべめりつれ(おありのようでした)」と聞こゆるに(と御返事申し上げると)、

「例、まめ人の(いつも生真面目な人が)、さすがに人に心とどめて物語するこそ(それなりに信頼して相談申すのが)、心地おくれたらむ人は苦しけれ(気の利かない相手では困ります)。心のほども見ゆらむかし(教養のほども知れましょう)。小宰相などは、いとうしろやすし(小宰相なら安心ですが)」

とのたまひて(と皇后は仰って)、御姉弟なれど(おおんはらからなれど、弟君なのだが)、この君をば、なほ恥づかしく(薫大将には失礼の無いように応対すべく)、「人も用意なくて見えざらむかし(女房たちも気安く会わないように)」と思いたり(とお思いになるのでした)。

「人よりは心寄せたまひて(大将殿はあの人を誰よりも気に入っていらっしゃって)、局などに立ち寄りたまふべし(局に立ち寄り為さるのでしょう)。物語こまやかにしたまひて(ず

いぶんと話し込みなさって)、夜更けて出でたまふ折々もはべれど(夜更けにお帰りになることもございますが)、*例の目馴れたる筋にははべらぬにや(良くある見慣れた男女の関係ではないのでしょう)。宮をこそ(と申しますのも、小宰相は三の宮の御多情を)、いと情けなくおはしますと思ひて(とてもだらしなくいらっしゃると思って)、御いらへをだに聞こえずはべるめれ(お返事すら申し上げないようですから)。かたじけなきこと(畏れ多いことです)」　*「例の目馴れたる筋にははべらぬにや」は＜普通の男女関係ではないのでしょう＞という言い方だが、当然に冗談だ。「夜更けて出でたまふ」が女房相手に情事以外の意味になることなどない。ただ、大将と小宰相なら節度は知っているから、変なことにはならず安心だ、というくらいの含みなのだろう。

　と言ひて笑へば(と大納言君が言って笑うと)、宮も笑はせたまひて(皇后もお笑いになって)、

　「いと見苦しき御さまを(三の宮の見っともなさを)、思ひ知るこそをかしけれ(分かっているとは感心です)。いかで、かかる御癖やめたてまつらむ(如何したら、あの悪癖を止められ申せますことやら)。恥づかしや(困ったものです)、この人びとも(皆そう思っているでしょう)」

　とのたまふ(と仰います)。

［第七段　明石中宮、薫の三角関係を知る］

　「いとあやしきことをこそ聞きはべりしか(ちょっと変な話を聞いたのですが)。*この大将の亡くなしたまひてし*人は(最近、大将が亡くしなさった宇治の人は)、*宮の御二条の北の方の御おとうとなりけり(二条院の三の宮夫人の御妹とのことです)。異腹なるべし(ことばらなるべし、異腹妹なのでしょう)。常陸の前の守*なにがしが妻は(ひたちのさきのかみなにがしがめは、前常陸守の何某という人の妻が)、叔母とも母とも言ひはべるなるは(叔母とも母ともいうことのようですが)、*いかなるにか(お相手が受領家の娘とは、どういうことなのでしょうか)。その*女君に(その姫君に)、宮こそ(三の宮が)、いと忍びて*おはしましけれ(こっそりお通いなさっていた、というのです)。　*「この大将の」と、「大将」に「殿」が付かない。皇后の立場なら「殿」は天皇および御所だけなので、臣下に「殿」を付けるのは変だが、女房の立場で「殿」を付けないで良いのだろうか。ただ、この場合は聞き手が皇后なので、皇后に対する敬意を表するために「殿」を付けないということはあるかもしれない。また、王家内での日常会話に於いては、逆に特別な場合、例えば本人に対して敬称するなど、を除けば、臣下身分の者に対して「殿」という個別事情に捉われず、役職だけで呼んでこそ、組織体系を認識した公平さが示されるのかもしれない。　*「人」とだけあるが、この「人」が宇治で亡くなったと噂されている薫大将の女だということは、この場では承知されている、と読みたいので左様明示補語する。　*「みやのおおんにでうのきたのかたのおおんおとうと」という言い方も、「二条院」を「御二条」と言うのは目新しいが、全体に客観的な表現で、とても分かり易い。「おとうと」は「乙人」で＜年少の者、弟・妹＞。男女に関わらず、同じ親から生まれた年下の人。と古語辞典にある。　*「なにがし」は注に＜『集成』は「「なにがし」は実名を言ったのをぼかして書く」と注す。＞とある。「〇〇朝臣」とか言ったのだろうか。　*「いかなるにか」は源氏高家が受領身分の者を対等に扱うのは変だ、という身分意識から来る疑問なのだろう。

当時の身分意識の具体内容は今とは相当に違うようだが、それが秩序維持に欠かせないものであることは今でも同じだ。およそ、組織秩序は権限を階層化した身分制度によって維持される。その身分制度が客観基準によって公明性があるか、世襲で生まれながら決まっているかは、実はどこまでも見直し続けねばならない永遠の問題だ。世襲は生命原理に基づく尊い資産継承の形態で、根源的な富の分配であり、決して絶対悪などではない。しかし、組織が互いの個体協力を期待する共同体である以上、その個体の縦の価値観だけで体制は構築できず、その価値観は当然に限定的に適用される。そしてまた、公明正大に客観基準を設定した競争も、開かれた場に多くの参加者を募り、その参加者の努力で生産性の向上が図られる事を期待するもので、確かに成功者には世襲に捉われない厚遇と地位が与えられるが、それはその高い生産性の実現の為にその者を活用するという意味であって、参加条件は根源的に別個の存在である個人を前提にするので、もともと公平性とは対立する手段であり、絶対正義や絶対善などではない。ただし、この社会の横の価値観は個体の生命体原理からすれば二次的だが、集合原理からすれば一次的で、絶対権力は実在する。しかしその実存は個体生存と相対的だ。此処に国家を一家と見做した組織体制に基づく富の再分配調整が企画される。国家の予算配分が、明文化や法治主義の有無に関わらず、その行政機関をして生産性の維持・向上と福利厚生の扶持に向けられるのは、集団の社会構成上の基本要請だ。だから結局、いつでも、その時々の総合判断として何処まで多くの人が納得できるかで、一定の社会制度の維持か破棄かは決まる。　*「をんなぎみ」はまるで現代語文の＜女性＞と言っているような響きで、個人の自由独立を尊重しようとする現代語が絶対独立していた王家の語用と似通うという奇妙な面白さも感じるが、当時の世情に寄り添おうとする言い変え文では、却って＜姫君＞としないと落ち着きが悪い。　*「おはしましけれ」は、下に「ば」が付いて＜というんだから＞「いとあやし」と冒頭句に倒置する構文なのだろう。

*大将殿や聞きつけたまひたりけむ(大将殿がその宮の横槍を聞きつけなさったか)。にはかに迎へたまはむとて(急遽その姫君を京に迎え入れなさろうと)、守り目添へなど(宇治の警護を増員して)、ことことしくしたまひけるほどに(固めなさったので)、宮も、いと忍びておはしましながら(宮もよくよく忍んで宇治へお出掛けなさりながら)、え入らせたまはず(邸内にお入りになれず)、あやしきさまに(護衛も手薄な粗末な姿で)、御馬ながら立たせたまひ*つつぞ(馬上で外にお立ちのままで)、帰らせたまひける(お帰りなさった、との事です)。
*「大将殿」と此処では「大将」に「殿」が付く。薫殿の個別事情を説明するからだろうか。また、此処は六条院なので、宮家の立場とは別に源氏家の立場として薫殿を敬うという意味も有るのかも知れない。明石中宮にはどちらも身内話だ。　*「つつぞ」は＜ままで＞という言い方だが、この「ぞ」は強調意ではなく事情説明の係助詞で、文の結びの「たまひける」の連体形は＜ものなり＞くらいが省かれているのだろう。

*女も(姫も)、*宮を思ひきこえさせけるにや(宮をお慕い申していたのか)、にはかに消え失せにけるを(大将殿の前から急に姿を消したのを)、身投げたるなめりとてこそ(思い悩んで宇治川へ身投げしたようだと)、乳母などやうの人どもは(乳母などの女房たちは)、泣き惑ひはべりけれ(泣き惑っていた、とのことです)」　*「をんな」は此処では閨での姿態表現ではなく客観表現の語用で、現代語語用に似て意味は分かり易いが、当時としては逆に宮家ならではの突き放した特殊な語用なので、むしろ当時の一般語であろう＜姫＞と言い換えないと不自然に見える気がする。　*「宮を思ひきこえさせけるにや」は注に＜『完訳』は「浮舟も匂宮になびいたために投身したと判断される点に注意。右近や侍従が真相をひた隠しにしていが、意外にも漏洩」と注す。＞とある。「意外にも漏洩」というのは説明

を簡略化したのだろうが、大騒ぎした失踪事件を火葬の真似事で病死と取り繕ったのだから、初めから無理は承知の隠蔽工作で、事の漏洩は時間の問題だとしても、秘匿したい管理者の意志が何処まで有効なのかが課題だったのだろう。ただ、それにしても、この大納言君の説明は簡略且つ明快で、その聡明さと事態の筒抜けぶりは確かに圧巻だ。

と聞こゆ(と大納言君は申し上げます)。宮も(皇后も)、「*いとあさまし(全く呆れた、宮の所業だ)」と思して(とお思いになって)、　*「いとあさまし」は＜それは驚きだ＞でもありそうだが、三の宮の軽薄な行動は天皇も注意なさっていて、にも関わらず、再度の宇治通いとは、我が子ながら呆れる、というところか。信じられない、というよりは、三の宮なら有り得る、というのが正直な印象だろう。大将が女を囲っていたことは、内親王を迎えた身とはいえ、外形上は特に問題無いはずだ。

「誰れか、さることは言ふとよ(誰がそんな事を言うのです)。いとほしく心憂きことかな(不都合な困った話ですね)。さばかりめづらかならむことは(そんな目立つ事件なら)、おのづから聞こえありぬべきを(自然に噂も立つだろうに、そうでもなし)。大将もさやうには言はで(大将もそのようには言わず)、世の中のはかなくいみじきこと(世の中が実にはかなく)、かく宇治の宮の族の、命短かりけることをこそ(斯くも宇治の宮の一族が短命だったことを)、いみじう悲しと思ひてのたまひしか(とても悲しんで仰っていたことか)」

とのたまふ(と仰います)。

「いさや(いえそれが)、下衆は、たしかならぬことをも言ひはべるものを(下働きの者はあやふやなことをも申すものだから)、と思ひはべれど(とは存じますが)、*かしこにはべりける*下童の(宇治山荘に仕えていた下僕童が)、ただこのころ(つい最近)、*宰相が里に出でまうできて(小宰相君の実家に出て参って)、たしかなるやうにこそ言ひはべりけれ(確かな話として言っていた、とのことです)。かくあやしうて亡せたまへること(このように姫が変死なさったことは)、人に聞かせじ(伏せて置きたい)。おどろおどろしく(不穏で)、おぞきやうなりとて(悲惨な話だからと)、いみじく隠しけることどもとて(山荘では固く隠していることなので)。さて、詳しくは(そのように詳しくは)聞かせたてまつらぬにやありけむ(お聞き及びあそばさぬことかと存じられます)」　*「かしこ」は注に＜宇治宮邸の下童。＞とある。　*「しもわらは」は子供なのだろうが、全くの年少者でもなく、物心付いた利発な子なら、出入が自由な分だけに事情通なのだろう。　*「さいしゃうがさと」は＜小宰相君の実家＞らしい。小宰相君と下童は縁戚関係なのだろうか。五章一段には「かくもの思したるも見知りければ」とあっさりと語られていたが、この下童から事情を知らされていたのなら、小宰相君は相当に具体的な事柄まで知っているのかも知れない。

と聞こゆれば(と大納言君が申し上げると)、

「さらに(今後は)、かかること(その話は)、またまねぶな(一切するな)、と言はせよ(とその下童に宰相君に言わせなさい)。かかる筋に(こういう男女問題で)、御身をももてそこなひ(三の宮が身を持ち崩し)、人に軽く心づきなきものに思はれぬべきなめり(世間の人に軽薄な者と思われてしまいそうですから)」

といみじう思いたり（と皇后は非常に心配に思いなさいました）。